

科学出版は、出版された研究成果への自由なアクセスに向けて増加している圧力を受けて急激に変化を遂げなければならない

Scientific publishing is having to change rapidly to respond to growing pressure for free access to published research

The Economist, August 5, 2004

<http://www.economist.com/science/PrinterFriendly.cfm?Story_ID=3061258>

1676年に認めた手紙の中で、アイザック・ニュートン (Isaac Newton) は、ずっと遠くを見ることができるのは、巨人の肩の上に乗っているからだ大変うまく表現した。ニュートンが手紙の相手 (短い背丈の競争者) に対して穏健であったか、あるいは辛辣な批評を行ったかどうかについては議論の余地があるが、この語句は、科学がいかに進歩するか一発見を迅速に公に出版することによって、他の研究者が人間の知識の最前線を押し広げるのに利用できる—についての見方の典型を示している。

何世紀にもわたって、大学図書館行きであった印刷雑誌がこのような出版活動の焦点であり続けていた。しかしながら、変化の動きは、このような静かで埃が積もった回廊を清掃しつつある。インターネットによって、経費と距離は、制限された少数者や特権階級の少数者のみに限らず、もはや研究成果を提供する際の障壁ではなくなった。事実、これによって、人々は、それらのような成果をすべての人がなぜ自由に利用できないかという疑問を持つようになった。

見事な産業自体が、学術研究—特に科学著作—の伝播を巡って構築された。STM (scientific, technological and medical) 出版と呼ばれるものに限っても 2,000 を超える出版者がある。全体として、これらの出版者は、毎年約 16,000 タイトルの雑誌に 120 万論文を出版している。それは、とてつもない成功である。しかしながら、誰もが完全に満足していないのだ。学者、大学および政府は、出版者が、食が足りて満足するほどにちっとも成長していないことを心配している。

雑誌の殺し屋 (Serial killers)

問題は、独占のそれである。むしろ、出版自体は、参入の際に障壁の少ない産業である。それは問題ではない。しかし、研究者は、最も権威の高い雑誌に論文を載せようと望んでいるので、ある雑誌は、重要な論文の不当に大きな分け前を獲得することができる。ある雑誌は、多年にわたって特別な威信 (exceptional cachet) を獲得してきた。それらの威信によって、研究者は適正な出版物の単独の論文に基づいて長期在職権 (tenure) や昇進や研究資金を獲得することができる。

これは、それらの雑誌の出版者が最良の論文を選び出し、積極的なフィードバックのループの中で名声を強化することを意味する。また、そのような出版者は、出版物に対する著作権を主張し、その独占を強化する。重要な論文 (あるいは、ついでにいうなら重要でない論文) を読もうとするならば、出版者に支払うしか合法的な選択肢はない。

その結果、大学図書館は、その価格がどんなであれ、また、余り重要でない著作に対する経費をしばしば犠牲にしても、一流雑誌 (leading titles) を購入しなければならなくなっている。権威のある雑誌を所有することは、このように金になるビジネスになりつつ

あり、このビジネスに対する多くの人々の信頼が悪用されつつある。

例えば、最近コーネル大学は、雑誌の収集方針の見直しを行った。見直しの途中で、1986年から2001年にかけてニューヨーク州のイサカにあるメイン・キャンパスにおける図書館予算が149%増加したことがわかった。しかしながら、雑誌購読タイトル数は5%しか増えていなかった。

基本的にその資金を大学図書館の書架にある多数の雑誌に支払っている政府もまた[事態に]気付きつつある。英国の下院科学技術特別委員会が7月に出版した報告書では、同じ期間の物価上昇指数が11%、科学出版物の量が20%しか増加していないにもかかわらず、英国の学術雑誌の平均価格が1998年から2003年にかけて58%上昇したことが分かっている。本報告は、STM産業の利益が飛び抜けており、オランダの会社の子会社である英国出版者Reed Elsevierを選び出し、ElsevierがSTM出版の市場リーダーであり、「経営レベルで34%程度」の利益を上げている、と付け加えた。

事実、Elsevierは、多くの方面から批判を招いている。例えば、コーネル大学の検討委員(reviewers)は、過去10年のElsevierの雑誌についての年間価格の上昇は、しばしば10%—時に20%—を越えることを観察している。

Elsevierの科学技術部門のCEOであるArie Jongjanは、納税や[通貨の]減価を加味すると昨年の利ざやは17%であり、一部で言われるほど高くはないと会社の利益について弁護している。しかし、それは依然として豊かな分配(hefty whack)である。彼は、Elsevierの雑誌が毎年多数の論文を出版するために、また、高い利益率がこれらの雑誌の持続性を保証するために必要であると、そのような現場の利ざやを正当化している。

すべてに対して自由(無料)?

しかし、Elsevierとその親族の支配は、攻撃にさらされている。英国下院科学技術特別委員会は、雑誌価格の上昇のみを嘆いているのではない。特別委員会は、英国政府に対して、英国の大学がすべての研究論文をオンラインで自由に利用できるように保証することを義務付けるべきであり、政府の研究助成金は、知見への自由なアクセスを付与条件に含むようにすべきであると述べている。政府は次の月に回答するだろう。

アメリカの政治家も対処しつつある。今月(8月)初めに米国下院歳出委員会は、米国国立衛生研究所(NIH: National Institute of Health)が公表した資料に対するオープンアクセスを支援する法案の但し書きを承認した。委員会は、研究の知見に対する公衆アクセスの欠如と雑誌価格の上昇への関心を表明した。委員会がコメントしているように、これらは、「このような研究に支出している納税者の一番の利益と反するもの」であった。

上院がこの勧告を承認すると、それは法となり、NIHは、いかなる雑誌であれ、出版6ヶ月以内に研究所が助成した研究をPubMed Centralと呼ばれる政府のオンライン・アーカイブに保管することを義務付けられるだろう。これが実現した場合、それは大きな意味を持つ。というのはNIHが助成した研究作業は、年間500,000件の論文に匹敵するからである。

ヨーロッパ大陸でもこの活動に加わろうとしている。2003年10月に、ドイツ、フランスおよびスイスの主要な研究協会が「ベルリン宣言」—研究知見に対する自由なアクセスへの別の形の要求—として知られることになる文書に署名した。宣言を支持しているグ

ループの一つであるドイツのマックス・プランク協会は、現在、所員がその著作の著作権を協会に返却するように雇用条件を変えつつある。協会の研究者は雑誌に[研究成果を]依然として出版できるだろうというものの、彼らの著作は、結局はオンライン・レポジトリに登録されることになるだろう。

ベルリン宣言に応じて、ヨーロッパ議会は、科学出版市場における価格、出版論文へのアクセスおよび著作権についての調査を開始した。というのは、科学論文の 41%がヨーロッパ（米国の 31%と比較せよ）で生産されているからである。この調査の成果は、出版産業に多大の影響を与えるものと予想される。

政治家や大学図書館が寄せている関心の一つは、著者が[経費を]支払う雑誌の出版を促進することである。新しいオンライン雑誌の多くが、費用を節約のため電子出版物を利用して、これを試みている。[研究]成果は、読者が自由に利用できる。

英国に本拠がある **BioMed Central** は、このような出版者の一つである。この会社は、1999年に創設されたが、未だ採算が取れるところまでに至っていない。しかし、会社の出版担当補佐である **Deborah Cockerill** は、[著者が支払う雑誌は]早く成長するので直ぐにそうなるだろうと語っている。**BioMed Central** が出版する論文数は毎年 2 倍に増えている。米国では、**Public Library of Science** と呼ばれる非営利機関が類似のビジネス・モデルを採用している。

他の可能性は、米国の医学研究に関する下院の提案を一般化し、従来の雑誌が限定された独占期間—6 ヶ月といわれている—の後、税金が支出されているすべてのコンテンツをオンラインで自由に利用させることを認めることである。

従来の出版者にとってこれらの考え方が喜ばしくないのは当然である。しかしながら、これらの出版者の一部は、先手を打って将来の 6 ヶ月後自由モデルに動きつつある。業界団体であるアメリカ出版協会の専門学術出版部会の副会長を務めている **Barbara Meredith** は、研究の知見に対するオープンアクセスの要求は、出版産業の持続性を徐々に衰えさせることになるかと発言し、この事件に対する精力的なロビー活動の展開を約束している。

今のところ、完全なオープンアクセス文献はわずかばかりである—**Public Library of Science** によれば[それは]出版物の 1%以下である。しかし、政府が、助成した研究成果はオープンアクセスの手法で出版すべきであると主張した場合、それは全く変わってしまうだろう。威信は時には役に立つ—そして、オープンアクセス雑誌自体は、確かに、極めて迅速にその序列を獲得するだろう。しかし、絶対的な名声にとっては、多分時間切れである。